



Title	歴史的出来事の実在性をどう考えるか : A・C・ダン トーにおける歴史の物語り論の検討
Author(s)	大塚, 良貴
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2006, 40, p. 33-49
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/7390
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

歴史的出来事の実在性をどう考えるか

— A・C・ダントーにおける歴史の物語り論の検討 —

大 塚 良 貴

問題設定

「歴史を物語る」という言い方にはなにか奇妙な響きがある。通常「歴史」は歴史学といわれるように、実際に何が起こったのかを正確に記述する社会科学の一分野であるのに対し、「物語り」と言えば、「むかし、むかし……」という文句をもって始まるおとぎ話をイメージするのが一般的な見方だからである。そこには、かつてブルクハルトが「歴史哲学」を「ケンタウルス、すなわち形容矛盾」と喝破した際に念頭にあった、「歴史」と「哲学」との関係以上の違和感がある。

しかし、一九六八年、歴史を「物語る」という言語行為から分析し、「歴史物語り」という表現の奇妙さを払拭する注目すべき著作が公刊された。現代アメリカの哲学者、アーサー・ダントーによる『歴史の分析哲学』（邦題『物語としての歴史』、原著は後に増補され『語りと知識』と改題）がそれである。^① 同書は、コリンゲウッドの

『歴史の理念』（一九四六年）以来、英語で書かれた歴史理論の書としてはもっとも影響力のある書であるといつてよい。そこでのダントーの議論は、歴史学的命題に特徴的に現われる論理構造を分析することによって、〈歴史とは過去の出来事を回顧的に組織化する科学的説明の一種であり、これは通常、物語るといふ言語行為によって行なわれる〉と主張する点で、自然科学（とりわけ物理学）に学問的規範を求めていた当時の論理実証主義とは一線を画すものであった。

さて、本稿はこのダントーの議論を吟味することになるが、ここで本稿の立場を明らかにするために、おおまかではあるがダントー以降の歴史の物語り論をめぐる議論状況を整理しておきたい。

ダントーの「歴史の物語り論」は、六〇年代の実証主義論争や「説明／理解」論争を揺籃としつつ、その後もアメリカではW・ギャリーやL・O・ミンク、ドイツではK・アッハムやK・レットガースといった論者に受け継がれ、「ナラティブイスト」と呼ばれる論者を生み出すことになる。彼らはおもに、歴史記述の言語分析をその手法として、歴史学的命題の真理や学問性をあつかう点で一致しており、「歴史物語りの論理学」に大分される。

他方、ダントーとは直接関係のないかたちで、修辞学を分析の手法とするヘイドン・ホワイトの仕事が挙げられる。ヘーゲルからクローチェにいたる一九世紀の思想家・歴史家の歴史記述を叙述様式の問題として取り扱うホワイトの名著『メタヒストリー』（一九七五年）の基本テーゼが示しているように、ここでは歴史学的命題の真理や客観性よりも歴史記述の類型論や時代表象の言語形象化が問題とされている。⁽³⁾ 歴史理論と文学理論を接続しようとするこの議論は、「歴史物語りの修辞学」と位置づけられる。

これらの議論状況に対し、とりわけ日本国内で、トラウマ的記憶の「歴史Ⅱ物語」への回収・解消を拒否し、歴

史の物語的表象不可能性に定位しようとする議論が提起されているのも看過されてはならない。高橋哲哉、大越愛子、上村忠男、熊野純彦といった論者に代表されるこの立場は、「歴史における他者」へとまなざしを向ける「歴史の倫理学」と言える。

このように、今日の歴史の物語り論をめぐる議論は大別してこの三者のうちのどれか、もしくはこれらを架橋する立場に分類されるといってよい。しかし、オランダの歴史理論家F・R・アンカースミットや国内で精力的に歴史の物語り論を展開する鹿島徹らが警鐘を鳴らしているように、⁽⁴⁾これらのそれぞれ出自の異なる議論を無自覚的に「異種配合」することはむしろ議論の混乱を招く恐れがある。そこで本稿はそうした混乱を回避しつつ、歴史の物語り論の理論的核心と目されるダントーの議論に焦点を当て、そこに内在する問題を洗い出す作業に専念したい。その問題とは、〈歴史を物語るというポイエーシスの行為から、どのようにして実在的とされる歴史的出来事へと移行しえるのか〉である。この問いに対し筆者は、〈すでに真とされている歴史物語と無関係に、歴史的出来事の実在性は保証されない〉と答えることにしよう。この結論(第三節)にいたるために、さし当ってダントーの議論の要点を示し(第一節)、そこに含孕される問題点を指摘する(第二節)という手続きをとることにしたい。

第二節 ダントー理解のための二つのテーゼ

ダントーの分析は一貫して歴史物語りの成立条件に向けられているが、この分析は以下の二つのテーゼに要約できる。

(1) 歴史物語りの要点は記述の量ではなく、回顧的なまなざしによって過去の出来事を組織化し、その意味を、連関を創出することである。

(2) 物語りとは、過去の出来事にかんしそのストーリーを提起することによって「なにが起こったのか」と「いかに起こったのか」を同時に述べる説明行為である。

(1) 歴史家の仕事は、未だ知られていない年表の空欄を埋め、憶測と偏見に満ちた歴史の「暗黒時代」を白日の下に晒すことであると思われるかもしれない。しかし、このイメージは歴史の作業を皮相的にしか捉えておらず、歴史認識の本質を量的な問題に還元している点では有害ですらある。極端な例ではあるが、ダントー自身が挙げている次の例を考えてみればよい。

ナラムシンは、神官階級からの圧力の結果、シッパルに太陽の神殿を建てた。そしてフェリペ三世は宗教信仰上の理由からもモリスコを追放した。そしてアーサー・ダントーはテルベテリ発掘をはやく始めるために、

一九六一年十月二〇日、七時が鳴ると目を覚ました[NK. 117, 145]。

この例は現実起こった出来事をそれが起こった通りに、しかもその理由にまで言及しながら記述しているにもかかわらず、一般的に理解されている歴史学的記述とは程遠い。このことは、実際の出来事をその生起の順序にしたがっていくら正確に記述しても、それは歴史の十分条件を満たすものではないということを示している。では歴史を成立させる要件とはなにか。それは強調や省略や排除によって複数の出来事を構造化する作業である。

具体的に考えてみよう。くりかえすが、歴史は先の例のようなたんなる過去命題の連言ではなく、その意味で過去に起こった出来事をすべて語り尽くし、写像し尽くすことを目指してはいない。このことは普段、われわれが何気なく用いている日常言語の使用に注目すれば明らかである。われわれは昨日なされた行為について語るとき、厳密に何時何分何秒に起こった行為なり出来事について語るのではない。ここで本質的に求められているのは、「昨日」を特徴づけていると思われる行為を選択し、強調ないし省略することである〔NK 115, 141-2〕。このことは歴史学的命題においても変わらない。たとえば「ウェストファリア条約は、神聖ローマ帝国を実質的に崩壊させた」という文を考えてみればよい。そこではこの条約発効に伴う数多くの影響のなかでも、帝国の崩壊だけが選択され強調されている。⁽⁵⁾

たんなる時間的継起の連続性は歴史ではない。出来事を物語る視点から強調的・省略的に組織化して述べることは、独自に構造化された時間的連続性、いわば物語りの連続性とでも言うべきものを紡ぎだす。語り手の観点から織り重ねられてゆくこの物語りの連続性は、時間の継起にのみしたがう線状的連続性にたいして、破線的連続性を呈するだろう。歴史物語りが目指すのは、この独自の時間的意味連関を創出することである。

(2) 出来事の記述と説明が同時になされること、すなわち両者の同時性については、日常的な言語使用においてはあまりにも自明なために気づかれていない。たとえば、事故における警官の尋問を考えてみればよい。自動車事故に駆けつけた警官は、「何が起きたのか」と問うたとしても「自動車事故が起こった」という答えでは満足しないだろう。事故が起きたからこそ、現場に駆けつけてきたからである。この文脈では、事故の発生それ自体が問

題となっているのではない。〈なになに〉と同時に〈いかに〉が、つまり事故がいかにして起きたのかのストーリーが求められているのである。まさにこのストーリーを提示するのが物語り行為に他ならない [NK. 202, 245]。

では、そうしたストーリーの提示による説明において過去の出来事はどのように組織化され、説明として機能するようになるのか。そのためにダントーは、まず関連する出来事（存在（生起）を確保し、さらにこの出来事間のの関連性を拡大して、その中間を詳述しながら構造化するという方法をとっている。⁽⁶⁾

まず出来事の記述と説明を同時におこなう最小単位としてダントーが提示するのは、「物語り文 narrative sentences」である。それはある時間的にはなれた二つ以上の過去の出来事（前件と後件）を関連づけ、前件について語る文である [NK. 143, 174]。たとえば、「アリストタルコスの仕事はコペルニクスの業績に先鞭をつけた」という文がこれに相当するだろう。ここでは「アリストタルコスの仕事」が前件、「コペルニクスの業績」が後件となり、アリストタルコスの天文学にかんする先見性が後のコペルニクスの業績と結びつけられて語られている。この物語り文の真理が確保されるのは、前件と後件が実際に生起している場合であり、これによって歴史物語はフィクション物語と区別されることになる。

しかし出来事を相互に関連づける物語り文をいくら寄せ集めても、それはまだ（１）で挙げたような過去命題の連言にすぎず、一篇の歴史物語りではないだろう。出来事を選別し、ストーリーのなかに組み込まれることを正当化する構造が要求されるのである。ダントーによればその構造化をおこなうのが「物語り narratives」であり、それは「始め」「中間」「終わり」をもち、この中間部を満たすことで始めから終わりまでの「変化」を説明するといふ [NK. 235, 283]。物語り文は任意の二つの出来事を結びつけ、前件についてのみ語る文であったが、物語りはそ

れにとどまらず、先の二つの出来事を始めと終わりとして、その中間に起こった関連する出来事やエピソードを詳細に語りだすことを目的とする。物語り文や物語りにおける出来事は、たんに指示されるのみならず、他の出来事と関連づけられストーリーの内部へと組み込まれている点で、それぞれすでになんらかの意味を負荷されている。この出来事の関連づけや意味づけが、たとえば変化や因果関係によってなされる場合に歴史的説明がなされたと言われるのである。

以上、ダントーの物語り論を二点にまとめて概観してきた。しかし歴史的出来事の連関が物語りという言語的制作（ポイエーシス）によって創出される場合、その連関の項となる歴史的出来事そのものはどのように確保されるのか。また出来事を回顧的に組織化しつつ、その〈何が〉と〈いかに〉を説明するという意味でこのダントーの歴史の物語り論が基本的な説明の要件を満たしているとしても、それが真か偽は未決定のままである。彼の歴史の物語り論がフィクション物語と区別され真となるための要件、すなわち出来事の実在の問題が残されている。次節では本稿の主題であるこの出来事の実在性という問題についてダントーが抱える困難を闡明なものとしよう。

第二節 ダントーにおける歴史的出来事の実在性の問題

ダントーの物語り論においてまず確保されねばならないのは、物語り文の真である。というのは先に述べたとおり、彼の「物語り」の概念は、物語り文の前件と後件を関連づけるといふ論理構造を拡大して得られるものだからである。そして物語り文は「さらにもしそれが真であろうとするなら、『前件と後件という』両方の出来事の生起 occurrence を論理的に必要とする」[NK. 164-5, 200]のであった。物語り文と物語りとの相似関係からすれば、物

語りの妥当性は、最低限、始めと終わりの出来事が実際に生起していることを要請する。したがってダントーにおいて物語りの妥当性や物語り文の真は、該当の歴史的出来事が實在していたことを前提として成立する。しかしそれは出来事の実在をあらかじめ前提した上で、それにもとづいて真なる物語り文を作りだし、歴史的対象の変化を説明することにならないか。ダントーによれば歴史学的命題の真は、歴史的に實在するものと次のような場合のときに真とみなされるという。

「歴史学的な文と歴史的事実とが關係する仕方は、このあらゆる真なる記述とそれを真とするであろうあらゆる實在との關係である」[NK. 323]。

少々わかりにくい引用だが、一般に文は實在するものと「關係」しているために真なのであり、これと同様に歴史的命題も歴史的事実と「關係」しているから真なのだ、という論理がここにみてとれる。「關係」という言い方が曖昧さを含んではいるものの、ダントーが物語り文の真理要件として過去の出来事の実在を要求していることは疑いない。

では、物語り文は歴史的實在とどのような「關係」にあれば、真であるというのか。あらかじめ言っておけば、それは言語と實在するものとの〈対応〉ではないはずである。かりに、物語り文の真理が實在的出来事なり対象との〈対応〉ないし〈一致〉によって確保されるとしよう。つまり真理の対応説によって決定されと考えるのである。しかし前節のテーゼ(1)で述べたように、物語り文はたんに出来事を指示したり、その継起的連続性を指示するだけにとどまらない。それは出来事の指示と同時に、それら相互の意味連関をも語りだす文であった。とすれ

ば、かつて存在していた出来事に対応している、というだけでは物語り文が真であるとは言えなくなる。実際に起こった出来事について言及してはいるが、出来事間の関係の記述としては誤りであるような文もありえるからである。したがって、物語り文が提示する物語りの連関においては、出来事との一致はその成立の必要条件でこそあれ、十分条件ではない。そもそも物語り文においては、その出来事連関が何と対応しているのかが非常に曖昧である。やや強い言い方をすれば、そうした連関は物語り文を語ることによって初めて気づかれ、それ以前にはわれわれの認識にとって存在しないのではないだろうか。その意味で、物語り文の真理は⁽⁷⁾けっして実在的な出来事との一致によってだけでは決定できないのである。

さて、真理要件に歴史的出来事の実在を要求している（もっといえばあらかじめ前提にしている観さえある）点で、ダントは歴史の実在論的立場をとっているように思われる。しかし奇妙なことに、彼はまた物語り行為によるポイエーシスの意義を、すなわち歴史学的出来事の連関は物語る行為によつてはじめて創出されるという反実在論的な主張も行なっている。つまりダントは、さきに述べた歴史的出来事の実在論をとりつつも、「科学用語を用いた文や観察の際に使用される文の主な役割は、現在の経験を組織化するのを助けることにある」[NK 79, 100]という発想を歴史記述に応用した「歴史の道具主義 historical instrumentalism」の立場に立つのである。歴史上の固有名詞と電子のような〈理論的存在 theoretical entities〉とが当該記述のうちで類似した機能を果たすことを指摘しつつ、ダントは次のように語っている。

「〈ジュリアス・シーザー〉のような語は、〈電子〉や〈エディプス・コンプレックス〉がそれぞれ物理学や精

神分析の理論で果たすのと似たような役割を歴史研究において果たしている。後の二つのような語を用いた文は、それらが実際の實在物を、仮にそれが観察できないものであれ、指しているか否かという問題を許容しないし、またその問題に当面することもない。というのは、それを問おうと問うまいと、それらの文は経験の組織化に際して、まったく同じ役割を果たすと思われるからである」[ibid.]。

そもそも道具主義とは、たとえば素粒子や電子などの實在性は認めないが、それらが原子や分子の運動を十分に説明し、現象をうまく記述できるかぎりにおいてその使用を容認する立場である。ダントーはこれを歴史の文脈に適用しようというのである。歴史の道具主義は過去の出来事、歴史の対象への指示や實在性といった問題をすべて回避した上で、言明が事象をどれだけ効果的に構造化できているかを問題にする。その場合、そうした言明の「真偽を問うことは論理的に不適となる」[ibid.]。

では、歴史的出来事や対象の實在性を前提にして語られる物語り文および物語りの定義と、ここで表明されている歴史の道具主義とどのように折り合いをつければよいのか。歴史にかんする實在論を、物語る行為以前に過去の出来事は経験的に検証可能ないし確証可能であるとする立場であるとすれば、そうした歴史の實在論者が道具主義などというややこしい立場に立つ必要はない。逆に道具主義の立場に立つとすれば、それは歴史的に實在した出来事の検証可能性が経験や観察によっては確保されえないことを承知しているからである。とするならダントーの物語り論は、歴史にかんして實在論と道具主義という相矛盾する主張を含むことになってしまふ。⁽⁸⁾

もし、物語り行為によって過去の事象連関が言語的に創出されるのに先立って出来事の實在性を認めてしまふな

ら、ダントーが歴史記述を物語る行為によって説明する利点がそもそもわからなくなる。というのは、この場合、歴史的出来事は物語り行為とは独立に存在することになり、われわれはなぜだかわからないが過去の存在や実在性を知っている、という奇妙な見解を支持しなければならなくなるからである。物語り行為による過去の出来事の連関創出作用を認めるのなら、歴史の物語り行為と過去の出来事との循環を問題にせざるを得ないのではないか。物語る行為に先立って歴史的出来事が実在したことを証明しようとしても、そのような証明は見込みのないものであろう。もしダントーが歴史の実在論的立場に固執するのなら、彼の議論は独断的とならざるを得ない。

ダントーに即した議論はこの辺で措くことにしよう。本節では、ダントーによる歴史的出来事の実在性のあつかに問題があることさえ確認できればそれでよい。以後、われわれとしては、ダントーの限界を乗り越えるような仕方では歴史的出来事の実在性について論じる可能性を独自に模索してゆく必要がある。そこで次節では、物語り行為による出来事の連関創出作用は堅持しつつ、過去の出来事を実在論的に前提するのではないかたちで、すなわち物語り行為との関係のなかで捉えなおす可能性について考えたい。

第三節 物語りの循環関係

さて、くりかえすが、過去の出来事間の連関とそれを紡ぎ出す物語り行為が不可分であることを留意すれば、物語り行為から独立にこの連関が存在したと認めることは論点先取の誤謬を犯していることになる。もしも歴史的出来事の実在性と物語り行為との関係について正當に語るのであれば、物語る行為と過去の出来事との間にある循環関係を指摘する必要があるだろう。大森莊蔵の時間論に触発され、科学哲学の方面から歴史の物語り論を展開して

いる野家啓一はこの循環関係を次のように説明してみせる。

「このように、歴史的出来事と歴史記述の間には、パラドキシカルな循環関係が存在します。確かに、歴史的出来事は歴史記述に存在論的に先行します。歴史的出来事が存在しなければ、歴史記述はその動機も手がかりも失ってしまうことでしょう。しかし他方で、歴史的出来事の存在は、「探究」の手続き、すなわち歴史記述を離れては確認することができません。この存在論的先行性と認識論的先行性との間にある循環構造こそ、歴史認識を根底において特徴づけているもののなのです」。

過去の實在性は物語り行為を前提にし、物語り行為は過去の出来事の存在を前提にする。この相互前提を歴史の「物語りの循環」と呼ぶなら、歴史的出来事の実在性は物語りの循環関係なしに捉えられないだろう。

しかし、これだけでは十分ではない。なぜそもそも物語り行為が、過去の出来事にたいして實在性を付与できるかという根本的な問題が残るからである。この問題を考えるには、われわれはすでにさし当って真とされている歴史を所有しているという事実から出発するしかない。

ところでこの先行する歴史が真とされるのは、それが過去に残されている諸々の痕跡（史料や遺跡）を批判的な手続きにしたがって整合的に説明しており、隣接する他の時代の整合的な説明ともやはり整合的であるからである。こうした整合的な物語りの説明は引きつづいてなされる別の物語り行為によって多様化し蓄積していった、やがて「物語の束」と呼びうるような相互にからみあう歴史物語のまとまりをなしてゆく。それは、他のさまざまな物語り行為を可能ならしめるような、歴史過程についての意味の総体でありこれから語られる歴史物語りの母型でもあ

る。われわれは伝承された真なる物語のからみあいという意味での「歴史物語の束」をすでに所有しており、それはいまのところ参照可能な証拠（史料）にもとづいている限りで真とされかつ過去の實在について語っているとされる。そのつどあらたに提起される歴史物語なり物語り文は、証拠として用いられている史料のみならず、この真とされる「物語の束」に照らし合わせてその真偽が判定され、過去の實在的な出来事について語っているかどうかと判断される。もちろん、この「物語の束」自体も永久不変のものではありえない。時に一つの歴史学的・考古学的発見が歴史を大きく塗り替えるように、個々の物語り行為によって「物語の束」も修正を余儀なくされることもある。このように歴史的出来事は、「かつてあったはずだ」という独断的な直感によって實在的とみなされるのではなく、先行する整合的な歴史物語との関係において實在的と認められる。H・パトナムの口跡を借りて言えば、歴史的出来事の実在性は（さし当って真とされる）歴史物語り内在的のみにみ容認されるのである。⁽¹⁰⁾

かくして過去の歴史的出来事は、「歴史物語り内在的」という限りにおいて、現在われわれが日常的に目にしている實在的な事物よりも限定された存在身分を有していることがわかる。過去に起こり、もはや過ぎ去ってしまった歴史的出来事の実在性は日常のナイーブな実感に訴えることができない。そこで歴史を物語る行為が不可欠になってくる。歴史的出来事は、それについて語る歴史物語とは独立に「實在した」とは言えない。ここにきて、冒頭で掲げた問い〈歴史を物語るといふポイエーシスの行為から、どのようにして實在のとされる歴史的出来事へと移行しえるのか〉に答えることができる。歴史的出来事の実在性は、先行する真とされる歴史物語と整合する限りにおいてのみ認められるのである。

結語

最後にもう一度ダントーに立ち戻って、その意義を総括しておこう。ダントーの分析でもっとも重要であると思われるのは、われわれの過去理解を直観的把握による構成からではなく、言語的に構成される組織化という側面から捉えたことである。ダントーは、「歴史的に存在するとは、過ごされる出来事を後に語られるべきストーリーの一部として理解することである」[NK, 342]と論じている。そしてこの事態を明らかにする自らの立場を「歴史意識の現象学の一部」[Ibid]としている。とすれば問題は、言語を媒介としたダントーの過去・歴史理解と、現象学が得意とする知覚的な「体験的過去」との関連であろう。その究明は、今後の物語り論の重要な局面をなすはずである。

注

- (1) Danto, A. C., *Narration and Knowledge*, New York 1985. (河本秀夫訳『物語としての歴史——歴史の分析哲学』国文社、一九八九年) 以下、本書への参照箇所はNKと略記した上で本文中に「原書の頁数、訳書の頁数」の順で指示する。また翻訳されていない章からの引用は、原書の頁数のみを記す。
- (2) Riedel, Manfred, *Verstehen oder Erklären?*, Stuttgart 1978, S. 160f.
- (3) White, Hayden, *Metahistory. The Historical Imagination in Nineteenth-Century Europe*, London 1975, p. xii.
- (4) Ankersmit, F. R., *Historical Representation*, California 2001, p. 21. 鹿島徹『可能性としての歴史——越境する物語り理論』岩波書店、二〇〇六年、五頁。
- (5) こうした議論は〈歴史家の現場を知らぬ哲学者〉だけのものではない。ドイツ社会史学の雄、R・コゼレックも、

実際に叙述される歴史は短縮化されたものであり、その意味で歴史家は歴史の虚構的性格を自覚せねばならないと述べている。Koselleck, Reinhart, *Zeitschichten. Studien zur Historik*, Frankfurt/M. 2000, S. 315f.

- (6) P・リクールは、物語り文と物語りとの関係、つまり諸々の物語り文からいかに一篇の歴史物語が編まれるかの説明がダントーにおいて不十分であることを指摘する。Ricoeur, Paul, *Temps et récit. L'intrigue et le récit historique*, t. 1, Paris 1983, pp. 264. (久米博訳『時間と物語』新曜社、一五二―二頁)

- (7) 歴史学における真理の問題にかんしては、とりわけドイツにおいて、七〇年代から八〇年代にかけてK・O・アーペルやJ・ハーバーマースらによって盛んに議論された討議倫理学 Diskursethik に依拠する議論が提起されている。はやくからダントーに注目していたH・M・パウムガルトナーは「……歴史学的知は、そのあらゆる基準にかんして根本的かつ最終的に合意と関係している」と述べ、この問題を合意形成 Konsensbildung の問題として提起している。Baumgartner, "Thesen zur Grundlegung einer transzendentalen Historik", in: H. M. Baumgartner und J. Rüsen hrg., *Seminar. Geschichte und Theorie*, Frankfurt/M. 1976, S. 298f. だがこのパウムガルトナーの〈真理の合意説〉にはなお説明を要する点がある。たとえば、合意に至るにはどのような事項が互いに前提されていないか。合意する者とは具体的に誰のことか。論証の手続きは具体的にどのようなものとして提示され、共有されねばならないのか。こうした点にまで踏み込んで論じられなければ、この合意説による真理基準を実際に運用することは難しいと思われる。

- (8) これと同様の疑念を提示したのは、D・ウェーバーマンである。Webberman, David, "The Nonfixity of the Historical Past", in: *The Review of Metaphysics*, vol. 50, New York 1997, p. 759. 彼はダントーが実在論者であると断定した上で、一方で過去の実在性を前提にしつつも、他方で物語りの組織化によって過去が実在的に変化しえるという「維持不可能な三元論」に陥っていることを指摘する。

- (9) 野家啓一、「歴史のナラトロジー」『岩波 新・哲学講座』第八巻、岩波書店、一九九八年、二八頁。こうした歴史における循環の問題については、すでに三木清が『歴史哲學』(一九四三年)において「存在としての歴史」と「ロゴスとしての歴史」の間に見出している。同書において三木はさらに、先の二つの歴史に「歴史そのもの」を作

る立場」である「事實としての歴史」を加えた三つの歴史の間の「辯證法的な關係」(『三木清全集』第六卷、岩波書店、一九六七年、五八頁)を問題化する。

(10) 歴史の物語り論にパトナムの「内在的實在論」を導入したのは、野家の卓見である。前掲書、六九、七一頁。しかし、このパトナムの真理論が「真理とは不変的 stable なもの、もしくは〈収束する〉convergent ものである」と掲言するとき、歴史の物語り論を自然科学と無批判に同列化してしまう危険性が潜んでいるように思われる。つまり、歴史的出来事の実在性をパトナムの「内在的實在論」をモデルとして説明する際に、その議論を根底で支えている真理の「収束的性格」が歴史の物語り論にも導入される危険があるのである。歴史学における真理が「収束」するか「拡散」するかの問題についてここでは論じられないが、少なくとも個々の歴史を包括する「大きな物語」の終焉を説き、小さな物語のネットワークをあつかう「歴史のミクロロジー」を標榜する野家にとって、歴史の物語り論における「収束」の問題はそのアキレス腱ともなりかねない。この「歴史のミクロロジー」にかんしては、野家啓一、『物語の哲学』岩波書店、一九九六年、一四四頁以下を参照。

(日本学術振興会特別研究員)

SUMMARY

How Should We Consider the Reality of the Historical Event?

— An examination of A. C. Danto's narrative theory of history.

Yoshitaka OTSUKA

It is undoubtedly A. C. Danto's *Analytical Philosophy of History* (1968) that makes obvious the importance of the narrative theory of history in terms of the modern philosophy of history. Making good use of "Ideal Chronicle", "narrative sentences" and "narrative structures", the concepts which have great influences upon following disputants, Danto takes the historiography as a narrative constitution which characteristically consists of the meaning relations between past events. So Danto seems to stand on the historical anti-realism insofar as he understands the historical description as an invention of such meaning relations, but on the other hand, he strangely admits the historical realism that the reality of historical entities is verifiable in advance of telling the story. It is necessary to discuss the interdependence relation between the historical events and the story-telling, so to speak "the narrative circulation", in order to solve Danto's contradiction and to make explicit the reciprocity between our historical knowledge of the past and its ontological status, by which most of the problems in the reflection of the history are brought about.

キーワード：物語論，歴史哲学，ダントー，反実在論，解釈学